



フランス国内旅行から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中堂, 恒朗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10470

フランス国内旅行から

中堂 恒朗

日記といっても手帳につけていたのだが、それによると、私がル・クロワジック (Le Croisic) に来たのは二月一四日 (一九七〇年) となっている。その頃パリやノルマンディ地方は雪が降っていたのだが、ブルターニュ地方は総体に良い天気で、太西洋沿岸のこの漁港町 (人口四千人余) も美しく晴れていて海の眺めがすばらしかった。しかし風が強くて耳を切るように冷たかった。ここは夏には海と光を求めてやってくる客で賑わう所だろうが、真冬とあつては訪れる人などほとんどなく、時々道に行くのは赤ら顔の遅しい漁民の姿だけだった。バルザックが恋人のベルニ夫人を連れてル・クロワジックに来たのは一八三〇年六月とあるから、とても好い気候の頃で、こんなこじんまりした、ひなびた、物静かな海辺の町を、年上の感能的な貴婦人の腕をとってしづしづと散歩していたはずのバルザックの姿には満足の気持がどんなにか溢れ出ていたことだろう。もつともベルニ夫人の当時の年齢は五十三才であつて (バルザックは三十一才)、バルザックのこの婦人に対する尊敬と情愛に変わりがなかったとしても、私の想像したほどの満足感が果して彼にあつたかどうかと私は考え直した。二人の関係は一八二二年に始まっていて、一八三〇年にはこの関係はいわば黄昏の時期に来ていたはずだ。バルザックは一八二九年に「ふくろう党」を出してやつと有名になつたばかりで、一八三〇年には創作のための猛烈な仕事が始まっていた。今まで秘められていた凡庸ならざる資質の突破口を遂に見出し得て、彼は熱っぽい闘志と野望に捕われていた。むろん文学上の野心が最も大きかつただろうが、このルネサンス的人間の再来とも思われる男は、政治のこと、事業のこと、社交界のこと、骨董のことにも思いをはせている。それから恋愛のことにも。一八三二年にはカストリ侯爵夫人とエークス・レ・パンからジュネーヴの方に行つて

いるし、一八三三年には問題のハンスカ夫人と初めてスイスのヌーシャテルで会っているし、一八三四年にはギドボニヱイスコンテイ伯爵夫人との関係が始まっているし……。こんなことを考えて行くと、一八三〇年六月頃のバルザックの気持は、うば桜との恋に溺れてしまうようなものではさらさらない。だからむしろこう想像した方がよいかもしれない。ル・クロワジックの海岸を、彼はベルニ夫人をいたわるように、彼女に附そい、語ることも少なげにしづしづと歩きながら、心にはしきりにいらいらするものを感じ続けていたのではなからうか。ベルニ夫人は一八三六年七月に亡くなっており、しかもその時はバルザックはマルブーティ夫人といっしょに北伊の方へ旅行しているときだった。バルザックはかつての恋人の死に目に会えなかったわけで、彼は後にそのことを悲痛な言葉で語っている。バルザックの一生の中で、彼に大きな影響を与えた女性をあげるなら、ハンスカ夫人とベルニ夫人だろうが、(もつともマリ・デュ・フレズネーという女性もいて、バルザックとの間に一子をもっている(一八三四年)が、この女性のことはよく分っていない)ハンスカ夫人(一八五〇年にバルザックの妻となる)の方はいかにも田舎貴族風のかたくまで自惚の強い所があり(もつともそういう面がバルザックには魅力だったかもしれないが)、バルザックに必ずしも良い影響を与えていないと思われるふしがあるのに反して、ベルニ夫人の方は母親のように優しくまた恋人としての色気もかなりあるといった具合であった。その上、バルザックは彼の母親には愛情を抱いてはいず、そういうコンプレックスを持っていて、しかも世間的に何ともうだつの上らなかつた野卑な青年の前に突如現われたベルニ夫人の姿は彼にとつて非常に重大な存在であった。バルザックには多少とも猥雑でレアリストのゴローウ氣質のあるのは確かであるが(しばしばそれは偉大なものを産み出している)、他方、北方風の浪漫的な面が深刻に(ということとは単なる流行でないことだが)作品に出ており、このいわば女性崇拜的な所はベルニ夫人との経験が少なからず彼に影響しているといわれる。この相反する面を共有しているということ、言うならば「ばら物語」を一人

で引き受けたといった風の、中世からのフランスの二つの伝統の合流点のような所に立ったということは、どんなにかバルザックの文学を広くまた深くしていることだろう！。

バルザックとベルニ夫人が、彼等の「関係」の末期において、ル・クロワジックを訪れたということは、彼等それぞれに、幸福と哀愁の混った味わい深い想い出を残すことになっただろうことは容易に想像のつくことである。海岸に打寄せる波、特にこの町の名所になっている岩石の岬（La Pointe du Croisic）に烈しくぶつかってくだけ散る波、その波の音は、私の耳の底に今も残っているし、恐らく百数十年前のこの二人の恋人たちにも消しがたい音として残ったことだろう。バルザックは一八三四年に、このル・クロワジックの海岸を背景にした短編小説「海辺の悲劇」を作った。この小説は、バルザックの精神的分身とも考えられるルイ・ランベールが、猷身的な恋人ポーリーヌを連れてル・クロワジックを訪れ、ここでブルターニュの漁師にまつわる息子殺しの悲劇を見聞するという設定になっている。バルザックの小説世界では、ルイ・ランベールはポーリーヌと結婚して間もなく狂死することになるが、現実の世界ではベルニ夫人の方がやがてひとり淋しく死んで行くことになるのであった。私は、かなりうまいカキ料理などで腹をふくらせ、ブドウ酒で顔をほてらせて、トレイック（Trehic）という名のとても快的なホテルの一室で、一方では「ずい分遠い所まで来たもんだなあ」と考えながら、しかし一方では右に書いたようなことをぼんやり考えながら、眠りにつく何分か前を過していた。外では相変らず寒風がびゅうびゅう吹いている……。

*

私がモンテーニュのシャトーを訪れたのは三月十五日のたいへん寒い日だった。多分その頃に大阪で万国博覧会が開催されたと思うのだが、当時の私の意識の中には万博のことなど全然なかった。このシャトーは、ポルドー市の東三八軒の所にある小さな町カステイオン・ラ・バタイユの北東九軒のところにある。とても不便な

田舎だ。モンテーニュはここで生れた（一五三三年）。彼はすぐに、ここから数軒程離れたパレスという村へ里子にやられてゐる。一五七〇年ポルドー高等法院参議の職を辞し翌年ここに引退し、以後ここを出るまいと決意した。三十八才の引退である。しかしもう頭は禿げていた。世は新旧両派の宗教戦争たけなわの頃だ。不寛容と残虐の支配する長い年月だった。ペストも流行した（一五八五年）。モンテーニュはここにこもり、死ぬまで（没年一五九二年）「エッセー」を書き続けた。狂信による野蕃を歎き、寛容と理性を説いた。それは理性的であることが難しい時代の理性だった。

シャトーの主屋の方は一八八五年（一八八四年という人もある）の火事の後再建されたもので、訪問者はここには入れない。有名な「塔」が昔のまま、残っていて、訪問客はガルティヤンに連れられて塔を上って行く（入場料二フラン）。石造りの、窓の少い、小型のドンジョンのような陰気な建物で、内部の狭苦しい石のらせん階段はかなり磨滅していた。この分では遠からず修復するか、あるいは客を中へ入れなくなるのではないかと思われた。三階にモンテーニュが「リブレリー」と称していた有名な書齋がある。こじんまりした円形の部屋の片隅の窓辺に、すっかり古びてしまった机と椅子が置いてあった。本はここには見当らず、どこかへ移管されたのだろう。梁にはいたる所にラテン語やギリシャ語の文句が刻まれてあって、今でも何とか判読できる程度に残っている。全部で五十四の文章があるらしい。この文章を収録したパンフレットを入口で売っていて、それには原文とフランス語訳がついている。「お、弱い人間精神よ！ お、盲目の心よ！ お前はいつも、何という暗闇の中で、何という危険の中で、お前の生存を浪費していることか！」とか「人間よ、お前はこのものがあのもよりお前にふさわしいかどうか、また、二つともお前にとって必要かどうかを知らない」とか「わたしは人間である。人間的なものはずべてわたしにとってよそ事ではない」とか「いかなる人間も確実なことを何も知らなかったし、これからも知ることはないだろう」とか「私には分らない」とか「私には理解で

きない」とかいう文句が見える。「人間」臭い文句が多い。「人間たち」から脱出したこの哲人は「人間」のことしか考えなかつたらしい。「あ、ヨーロッパだなあ!」と私はつくづく思った。悟りも無常もない。

この書齋と接して暖爐のある小部屋があり、ここは冬に使ったところらしい。窓からの見晴らしがよく、山（モンターニュ）の上からおだやかな美しい自然を展望する感じだった。主屋からこの「書齋」までかなり離れているが、モンターニュは「運動にもなるし、みんなから逃げてもらわれる」ので、ここが気に入っていた。「私はここにおける私の支配を絶対的なものにしよ」とつとめる。そしてこの一隅だけは夫婦、親子、市民の共有から引き離そうとつとめる。ここ以外では、私はどこでも口先だけの權威しかもっておらず、その実質は疑わしいものにすぎない。私の考えでは、自分の家に自分自身の立ち帰るところ、自分自身のことだけを考えると、自分で隠れるところをもたない者は実にあわれである。野心はその信奉者たちに立派に仕返しをしている。彼らを常に市場の彫像のように、衆人の目にさらすからだ。『大きな運命は大きな隷属である』彼らにとってでは便所さえも隠れ場ではない。云々（「エセー」第三部第三章より。原二郎訳）。しかし、今しもこの隠れ場は、極東からはるばる来た貧相な中年男のキョトキョトする視線にさらされ、ケミカル・シューズに踏み荒らされているのだ。私はモンターニュのベットも見たし、便所も見た。

このシャトー訪問で、もう一つ書いておくことがある。小男のガルディヤンは、日本人同様貧相な年配の人であったが、彼は「日本にはまだハラキリがあるのか」と尋ねた。「そんなのは古い習慣で、今の日本にはない」と私は答えた。しかし、帰国して（一九七〇年八月）三ヶ月程経ってから、それが必ずしも古い習慣ではないということを知った。

*

五月二十一日の午後四時頃、私はアヴィニョンの橋の上に立っていた。（正しくは聖ベネゼ橋という。十二

世紀後半に造られたといわれる。「みんな輪になって踊る」には狭すぎる橋である。橋の途中にサンニコラという小さな礼拝堂が立っていて、その中で若い恋人たちが抱き合っていた。橋は今も途中までしかなく、対岸へ渡れない。水量豊かなローヌ川の流れはとても速く、見ていると水流に吸い込まれて行くような気がした。アヴィニヨンの町（人口九万足らず）は城壁に取囲れて、中世都市の趣きをそのまゝ、残している。外から見ると大きな牢獄みたいだ。その中にたくさんの人々がひしめきあっていて、そのざわざわした感じが日本の町のようにだった。観光客も多い。それに木曜日で（小学校は休み）折からの好天の下、子供連れの市民たちの姿も多かった。「法王廳」の横にある公園のベンチにすわって、幼い女の子たちが遊んでいるのをぼんやり見ているのを思い出す。時々彼女等の声から「二人称単数の単純未来形」などが飛び出してきて、「チェッノ！小さいくせに、うまいこと変化させよるわい！」と私は心の中で言ったりした。法王廳（十四世紀に造られた）に入ったのが午後五時で、案内人は南仏なまりのひどい、頑健な男だった。この宮殿は大きく二つの部分から成っていて、中庭に立って向って左側から正面の所に建っているのが、ベネディクトゥス十二世の作った古い建物で、右側から背後（入口の門がある）の所に建っているのがクレメンス六世の作った新しい方の建物。前者の方がずっと大きく、また、見ごたえがある。一階の広い部屋に会議室があり、今はがらんとしているが、昔は「幽閉」された法王が枢機卿たちを集めて密議を凝らしただろう所だ。この会議室に接して小さな聖堂が外につき出していて、そこに美しい壁画が見られた。二階の大きな部屋には宴会場があり、使節などが来たときのここでの華やかな様が想像された。順路は古い建物から新しい建物の方へ移って行くのだが、新しい建物の一階の広い部屋で、新作のピカソ展をやっていた。雄勁な筆致で男女の（特に女の）露骨な肢体を描いたデッサンがいくつも並べてあった。古い石の臭いする。空洞のような、陰気なこの法王廳の中の一室で、生命力が奇怪なバラとなって開花していた。

アヴィニオンから東南の方へ伸びているデュランス川（ローヌ川の支流）に沿って六〇軒ほど行くと、カドネ（Caderet）という小さな町がある。人口二五〇〇人位、ヴォクリューズ県。カドネ駅前にオ・ゾンブレル（Aux Ombrelles）という旅館があり、そこで泊った。私がフランスで泊ったホテルで最も快適なものをあげるなら、このオ・ゾンブレルと、ル・カネ・デ・モール（Le Cannet des Maures）という田舎町（プロヴァンス地方、ヴァル県）の近所にある「ラ・ジェルフローワーズ」（La Gerfroise）というホテルをあげる。それからポワチエの郊外にあった「ル・シャレ・ド・ウニーズ」というホテルもよかった。オ・ゾンブレルではレストランと泊る所とが別々の棟になっており、私は一階の部屋に泊った。一階の泊り部屋というのはフランスでは珍しい。

翌日も快晴だった（五月二十二日）。朝食を食べながら窓外の景色を眺めていた。取りたてて美しい眺めというわけではなかったが、濃い緑色した背の低い樹木を見ていると、日本がとてなつかしかった。パリあたりの木は背が高いものばかりなのだ。

カドネから一里ほど北に行くと、ルールマラン（Lourmarin）という村（人口六百余人）がある。ここはアルペール・カミュがパリの喧噪を逃れて好んで滞在し、仕事をしていたところだ。彼が住んでいた家の前の通りは、今ではカミュ通りという名がついている。この村のささやかな墓地の中に彼の墓がある。彼は一九六〇年一月四日自動車事故で死んだが、遺体はここに埋められた。

早朝の（午前八時すぎ）南仏の空は海のように青かった。墓地には誰もいず、ミストラルがびゅうびゅう吹いている。糸杉があちこちに生えていて、木々はみな、同じ方向に少し斜めに立って強風に吹かれるがま、なっている。ゴッホの絵を見るようであった。カミュの墓は平べたい石で、その上に ALBERT CAMUS と大きく刻まれてあった。その字は東の方を向いていて、前に立っている私の影が黒々と墓石の上に伸びていた。私

はしばらくじっと立っていた。